

---

# 秋って時期は難しい

澄田 康美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秋って時期は難しい

### 【コード】

N0076P

### 【作者名】

澄田 康美

### 【あらすじ】

あらすじ

ある秋の日、みすばれた神社に訪れた彼女の前に、悩める巫女が現れた。

## (前書き)

### 前書き

この短編は、友達の罰ゲームによって書かされました。

やれやれ・・・罰ゲームで短編書くとか世も末ですね。

まあいいや。全てはノリに任せるがわしのやり方!!

中身があれですけど、まあ気にしないでください。

キーワード＝お題ですからね。

ではどうぞ。

秋の中頃、する事もないな〜って思ったわしは、

小学生の頃によく遊びに来ていた神社に訪れてみた。

単純に言えば、たまたま近くを通りかかって、懐かしいって思って立ち寄ったんだ。

こんな事してるわしは、つくづく暇だな〜って思う。

それでもいいやと、とりあえずわしは神社にありがちななっがい階段を、

かつたるいなあと思いながら昇っていった。

昔はこんな階段も楽しく上ってたんだなあと感慨にふけて、

高3の今は純粹にだるいなあと行って、一番上にまで上って行った。

長い分だけあって、そこからの景色も町並みを眺めるにはいい高さだ。

思った以上に変わらない町並みを、わしは体を伸ばしながら眺める。いい感じで柔軟できたかなと思えたところで、今度は神社の方に振り向いた。

ぶっちゃけると、ぼつろいなあと思いながらも、賽銭箱の前辺りまで歩いた。

改めて見ると、多分この神社だって何一つ変わってはいないのかも、しれないけど、

久々に見た上にあんまり記憶にも残ってなかったから、なんだか新鮮な気持ちになれた。

賽銭ぐらい投げ込んでやろうかと財布のチャックを開けようとした瞬間に、

後ろの方から、女性らしき声がしてきた。

「もし・・・その人？」

わしがのんびりと後ろに振り向くと

ちゃんとした巫女服を着た、わしより幼そうな黒髪かつ長髪の巫女さんがいた。

今時のずれた巫女服とは違う。ちゃんとした日本古来の巫女服。

それを見たわしは、さっきよりもっと新鮮な気持ちになって、その巫女さんをじろじろと見た。

挙動等が怪しかったらしく、巫女さんが戸惑った様子になってわしを見てきた。

「あの・・・ちよつと?」

おっと、これ以上は危ない奴にしか見えないね。

わしの理性がしっかりと働き、わしは彼女の服装等をじろじろ見る事を止めた。

でもって、ちよつと改まった感じになって、わしは話しかけてみた。

「あのさ、あなたってこの神社の巫女さん?」

「その通りです

私はこの三島御霊神社の巫女の、平脇ひらわき 千波ちなみと申します」

ペコリと頭を下げ、礼儀正しい挨拶をされたわしは、

少しだらしない調子で、とりあえず挨拶をした。

「ええっと、わしの名前は澄田<sup>すみた</sup> 康美<sup>やすみ</sup>  
まだ学生の身だけど、将来は農業をしていこうと思ってるの  
よろしくね」

一応それなりの大きさの声で言ったんだけど、

どうしてかその子はわしの声が聞こえていない様子だった。

こう、どこか上の空って言うのか・・・悩みを抱えているって言う  
のか・・・

まあ無視されたままじゃちょっとねと思っただわしは、

どこかを見ている巫女さんの目の前で、手をひらひらとさせてみた。

巫女さんは「はー!!」と意識を取り戻した様子で、わしの方を見て  
きた。

「す、すみません!!ぼーっとしてしまって・・・」

ふむふむ・・・これは恐らく・・・いや、确实だね。

わしはその子が抱えている悩みのな物を 見抜いてみた。

「もしかして、色恋で悩んでるの?」

わしの一言が完全に凶星だったのか、

その子は顔を真っ赤にして、必死に否定する態度を見せてきた。

「ちちち違いますよ！！わわわ私はみみみ巫女ですよ！？  
そそそそんな事は駄目に決まってるでしょ！？」

おやおや、これはもう確信に変わったね。せつかくだから、もっと揺さぶってみるかな？

「で、やっぱりジャーニーズとかそういう系統なのかい？」

「ち、違いますよ！！あの人はこう、優しいって言うか、素朴な人って言うか・・・あ」

あらら、これは口が滑ったって様子だね。

自分で自分の口を塞いでも、出てきた言葉はもつとつにもできないからね。

おっと？うつむいて塞ぎ込んだじゃった。よほど言いたくなかったのかな？その事が。

だーけーど、わしはこういう子を放って置くような人間ではないの

だ！！

わしはその子の顔を覗き込み、にんまりとした笑顔を向けて、問いただしてみた。

「ふふふ、悩みがあるなら澄田姉さんが聞いてあげるよ〜？」

「……………本当ですか？」

お〜？悩める子羊が、藁にもすがるって感じで乗ってきたよ〜？

ふっふっふ、ちょっと面白そうだねえ。まあ一応真剣には聞くけどね。

「で、あなたが好きな人ってのは、一体全体どんな子？」

「え、えーっと…………と、とにかく優しいんです！〜！」

「ふむふむ、それで？」

「い、今時の人らしくないっていうか…………ちょっと昔っばいっていうか……………」

「ほっほっ、後は？」

「えーっと…………その…………何と言えはいいのでしょうか……………」

おっとと、これ以上は聞いても意味ないね。

わたしにはこういう子の気持ちってのはよくわかる。

恋するっていうのは、理屈でどうにか説明できるもんじゃないからね。

「いや、まあもう言わなくてもいいよ」

「わ、わかりましたあ……」

あからさまにほっとした様子見せんでもと思ったけど、

こういう事言うのって予想外にしんどいから、まあ仕方の無いことだ。

で、聞いた事をちよいとまとめると……ド田舎にいそうな子だね。

多分同年輩の子だろうか。

この町は大概田舎だけど、そんな田舎スピリッツを持った子がいるのかいな？

む？どこからか気配がする……これはまさか!？

「あ、あの……ちょっといいですか？」

わしの本能が告げている……この声の主こそ、まさに田舎スピリッツの持ち主！！

その予想通り、わしの目の前で話をしていた巫女さんは、

超慌て気味に後ろを振り向いたんだから。

「よ、良広さん!？」

おーい、声でけえよ巫女さん？それはどう考えても不自然だぜ？

ま、好きな人目の前にしたら、結構な女性はこうなるのが自然の摂理。

それも、こんな純白そうな子だったら余計だね。

ついでにわしは真っ黒……って何言わすんじゃない!!

「千波さん

あのう……お取り込み中でしたか？」

お、そろそろわしもその顔を拝ませてもらおうかい。

・・・わーお、野球少年に純粹をプラスして、田舎で割ったみたいな子だよ。

要するに半そで半ズボンに丸刈りボーイですたい。

ほっほう、これはまた現代に逆らった調子だねえ。

おっと、そろそろ分析するのはやめて、話を進めさせよう」

「まあま、お取り込みってほどでもないから、千波ちゃん、出迎えてあげなよ」

「は、はい・・・」

ふふふ、めっちゃくちや緊張しちゃってるねえ。見てて面白いわこれ。

で、お相手の対応は・・・おろ？何かもじもじしてませんか？

これって・・・もしかしてお約束パターン？

「あ、あの・・・いつも仕事にすみません・・・」

「わ、私は・・・別に構いませんよ・・・」

仕事と言っても・・・あって無いようなものですから・・・」

営業妨害に職務怠慢。言い方かえるとこんなに怖くなる。

で、実際の中身はこれ。お互いに会いたいからわがままになってるだけ。

おいおい、なんだよなんだよ、これじゃわしの手助けいらなくねえ？

……あ、もう理解しちゃったよ。これは駄目だって理由が。

「あ、あのその……い、いい天気ですね……」

「そ、そうですね……私もそう思います……」

「こ、この天気もそうですけど……昨日の天気もよかったですねえ……」

「は、はい……今日ぐらいいい天気でしたねえ……」

……おい？

うーん、これはいけませんねえ。これでは進展も何も望めませんよお？

今時天然記念物並に珍しいカップルって匂いがするけど、

まだカップルにすらなっていないこの現状では、

お互いに触れ合う事のできない絵に描いた描かれたの関係だね。

これ以上見ても得られる物など無いに等しいと判断したわしは、  
後ろから千波ちゃんをポンと叩いて、前に出てやったさ。

「は？」

「ごめんね、お姉さんちよーつとこの子とお話するからさ、君は帰  
つてくれない？」

「は、はい・・・わかりました・・・」

とぼとぼと帰っちゃったね。そんでもって当然この子は怒ると。

「ちょ！？康美さん！！せ、せつかく彼と二人っきりで話をしてい  
たのに、

水を差すとはどういう事ですか！？」

やれやれ、嫌われ役ってのはいつの時代も嫌なものだねえ。

しかし、ここは彼ら二人の未来の為に、わしは一言言わなくては  
いかなのだ。

「はっきり言うけど、あのままじゃ進展も何も無いよね？」

いくら好きだからって、あのまま進展なしで延々とべしゃくるだ

「けで、満足？」

「!!!……いえ……」

「よし、わかってくれたみたいだね

物分りと素直な子はお姉ちゃん嫌いじゃないからね」

「あ、ありがとうございます……」

「さてと、とりあえず話を進めるとしましょうかい

ぶっちゃんけるけど、あの子多分千波ちゃんの事好きだよ？」

「え、えええええ!!!?そ、それって本当ですか!？」

いやね、傍から見れば丸わかりなんだよね。でも当事者ほど気づけないのは世の無常。

「うん、まあほぼ確実だね

だから、わしがある作戦を提案してあげようと思う」

「さ、作戦?何ですかそれって?」

「ふふふ、それはね

「



作戦の内容は、まあこーんな感じである。

まずわしが悪者役として、夜の神社にて嫌がらせっぽい事を行う。  
でもってそれに参った千波ちゃんは、愛しの彼に助けを求める。

彼がわしを追い払って、いいムードになった所で告白！！って魂胆さ。

恐らく彼にとってわしは迷惑な奴にしか見えない出会いをしたからこそ、

この作戦は通用するはずなのさ！！

ぶっちゃけると、秋って季節にこんな作戦は通用し辛いかと思うけど、

あの子曰く何か彼は来年の春にでも引越すなんて事言ってるらしいから、

事は一刻を争う事態。ならばとこの作戦を実行するしかあるまい。



当日の夜、わしのセッティングした通り、

わしは千波が神社を守ってるノリを、

どうにかしようとする悪徳業者？みたいな感じで彼を待っていた。

変装程度にサングラスつけてみたけど、眼鏡付けられないから視界が霞む……

こつこつ時に視力の悪さを後悔するぜ！！

さてさて、そろそろ彼が来るだろうから、スタンバイするよ。

「千波ちゃんはおくまで、純粋に守る的なポジションでいてね  
絶対にボロを出すんじゃないよ？」

「はい！！わかりました！！」

「よしよし、いい返事だね

演技する時もそれぐらいの元気をよろしく」

わしの言う事にあくまで素直な千波ちゃん。

それじゃ、彼がそろそろ来るって頃合だから、わしが怒号を飛ばすとすつか。

「いつまでこの土地を渡さないつもりだい!？」

こんなぼつろい神社なんか潰して、

マンションでも建てた方がよっぽど有意義じゃないか!!

あんたも頭の固い奴だねえ!!」

半分演技、半分本音なこの脅し中に、ようやくと王子様が助けに来ましたよ。

「や、止めるんだ!!それ以上千波さんを傷つけようとするな!!」

ぶっ・・・思わず吹きそうになった・・・今時そのノリないわ・・・

おっとと、ここで笑ったら作戦瓦解は必死。堪える澄田!!

それじゃ、当初の予定通り、彼に絡むとしようかな。

「なんだいあんた!？どっかで見たと思ったら、以前見た坊主じゃ

ないか!?

変な正義感振りかざしてると、痛い目見るよ!？」

おゝ、我ながらくっさい演技。でも演技は得意だから多分大丈夫。

さてと、後は彼がどう出るかだけど・・・多分大丈夫だね？

「ぼ、僕はそんな事で怯まないぞ!！」

よーしよし、とりあえずガンダッシュで逃げるとかはしなかっただけマシとするか。

後はまあ、適当にお相手するとしようか。

「そうかい!!--それじゃ、うるさいあんたを追っ払うとしようか!!--」

これなら、わしが女性と言えども彼も思いつきりやってくると思う。

わしは打たれ強いから、ちょっとやそつとの打撲はまあ大丈夫だよ。

そんじゃ、思いつきりやるとしますか!!--

「へ!!--素手で来る時点であんたの負けさ!!--わしの鉄バットを喰

「らいな!!」

実際思いつきり外すつもりだから、避けて頂戴ね。

「や、やってやる!! わああああああ!!!!!!!!!!」

おいおい? 思った以上の威勢の良さは認めるけど・・・その真つ直ぐさ・・・的ですよ・・・

いつもなら思いつきりなく・・・げふんげふん、これじゃ外す方がある意味難しい

まあ外さないと犯罪確定するから、

わしは思いつきり彼からの外的な方にバットを振り下ろした。

バットは地面で派手な音を立てて、彼はわしの懐に潜り込んだ。

もぐりこ・・・あれ? もしかしてこれって・・・

「ああああああ!!!!!!!!!!」

ず、頭突きかーい!!!! しかも顎つてえ!!!

「いったあー!!」

もう演技じゃないよこの痛み!!!マジじゃれになってない!!!  
わしは頭突きされた勢いのまま、思いっきり背中から倒れた。これも超痛い。

で、彼はその勢いのままなぜかわしの胸に倒れてきやがった。何してんだいおい？

とりあえず、降参の台詞でも吐くとしようか。

「くっそお!!こんな強いガードマンがいるなんて聞いてないよ!!  
この土地の買収はあきらめるしかないね!!覚えてな!!」

22

華麗に捨て台詞吐いて、わしは失礼しますだ。

と言っても、完全に失礼したら様子見れないから、こっそり影から見るべ。

おーおーおー?これはうまく言ってるんじゃないのかあ?  
相変わらずもじもじしちよるけど、結構いい雰囲気だよお。

「あ、ありがとございませす・・・良広さん・・・」

「いや・・・たまたまだよ・・・」

うん、ぶつちやけるとボコボコに出来たけど、ボコボコにしたら何の意味もないからね。

だから、今回はまあ花を持たせないかね。

「そ、そんな事ありませんよ・・・良広さんがいなかったら・・・私・・・」

よしよし!!そのまま彼の胸に飛び込めい!!

「・・・千波さん!!」

おい!!?彼がまさかの行動だあ!!千波ちゃんを抱きしめちゃったよお!!

「よ、良広さ・・・あの・・・」

「ごめん・・・だけど許してほしいんだ・・・」

おーおー、見せ付けちゃってねえ。こんな誰もいない(わし除いて)神社でねえ。

「良広さん……あの……私……ずっと伝えたかった事があるんです……」

「千波さん……実は僕もあるんだ……言ってもいいかな？」

……さてと、そろそろわしは失礼するのでしょうか。

え？なんで最後まで見届けないかって？それはあんた、お邪魔虫はいらんでしょ？

それにぶっちゃけると……眠いしね……わしは朝方人間なんだい！！

さーてと、くそ長い階段下りて、帰らせてもらおうとしますか。

お、そう言えば何かを思い出せた気がする。

ああ、そうだそうだ、やっと思い出せた。



そう言えばわしも、ここで一目惚れした事があったんだ。

それがわかった瞬間に、彼女との出会いが、何か運命めいているものを感じたんだ。

ま、やっぱり気のせいかな？どっちでもいいか。

わしは神社の下に止めてある自転車に颯爽と乗って、その場を後にしていった。

夜風がちよいと冷たかったけど、まあ彼らの未来を思えばそんな事気にならないさ。



後日、わしはその神社に訪れる事はなかった。

噂に聞いたところによると、おじちゃんとかからアイドル的な存在の巫女さんに、

彼氏が出来てショックを受けた奴が大勢いたって話は聞いている。

で、その時の話に尾ひれがついて、わしが何かヤクザみたいな扱いを受けているらしい。

今は受験で忙しくなったから行けないけど、

受験が終わったらとっちめてやるんだからね



秋って時期は難しい  
あなたの中で続く



(後書き)

後書き

あゝ、たりい……

ただでさえ連載7本の更新急がせたって言うのに、短編まで書けてね？

そりゃだるくもなりませあ。だから若干手抜き気味。

所詮短編。されど短編。

まあ久々に書いたから、ちょっと気合入れたつもり。まあいいじゃないか。

スペシャルサンクス

澄田 康美

平岡 千波

西尾 良広

黒詩鳥さん

バクテリア

そんじゃ、こんな適当な駄文をお読みいただきまして、まっことありがとうございます。

ではまた（\*^|^\*）

b y 澄田康美

P S / 無茶振りこなす自分の才能に（r y

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0076p/>

---

秋って時期は難しい

2010年11月19日18時58分発行